

幼児・児童向け英語教育の教材研究と実践： 短期大学生とともに

小 玉 容 子
(英文教室)

English Teaching Materials and Teaching Methods for Pre-School and Elementary School Children：
Workshop with Junior College Students as Student Teachers

Yoko KODAMA

キーワード：Kids' English, Teaching materials, Teaching methods, Student Teachers,

2002年度から島根女子短期大学文学科英文専攻の学生達と、卒業研究の一環として、幼児・児童向け英語教育の教材研究および実践を始めて3年が経過しようとしている。一年目の2002年は小学校で「総合的な学習の時間」を利用した英語活動が本格的に取り入れられた年である。子ども向け英会話教室熱も高まってきており、子どもの英語教育に関心を持つ保護者はますます増えていると推察された。このような状況の中で、幼児・児童英語教育に対して高い関心を持つ学生も増えており、私の研究室でも子どもを対象とした英語教育分野に取り組み始めた。本稿の目的は、この過去3年間の教材研究と実践を整理し記録すること、そして実践に際し学生達がどのように学んでいったかを明らかにすることである。そしてこの報告を短期大学生の今後の幼児・児童向け英語教育活動の研究と実践に役立ていきたい。

一年目は児童英語教育の実践に関する論文や参考

文献を読んだり、出版されている幼児・児童英語教育教材を参考にしたりしながら、学生と共にアイデアを出し合い教材(道具)を作成し、それらを使って幼児を対象とした英語活動を実践した。当初、小学生低学年を対象とした英語活動を視野に入れていたが、本学での定期的な英語活動の実施や小学校に出かけて活動を実施することが難しく、対象年齢を幼稚園児(保育園を含む)に下げて実施することにした。低年齢児を教えることは語学的、文化的な知識のみでは対応できない部分も含んでいるので、子ども達の関心の持ち方、興味の持続の様子などを知るために、小学校で英語活動講師をしている本学卒業生に講師を依頼し体験談を聞くことで、教材研究に併せて活動の進め方を研究した。

この年は本学が協力協定を結んでいるアメリカ、セントラル・ワシントン大学(CWU)からの交換教授が3才、6才、8才の三人のお子様を連れ家族で本学に半年間赴任されていた。英語活動の実践に

際しては、交換教授のご家族に参加を依頼し、英語活動の場が国際交流の場となるように計らった。

学生達は又、例年 10 月第 3 週目 (又は第 4 週目) の週末に開催される島根県立女子短期大学学園祭において“Kids' English”を企画し、30 名を超える子ども達の参加を得ての一大イベントとなった。

二年目の 2003 年は前年の内容を土台とし、2002 年度の教材と新しい教材を組み合わせ、実践を中心に教材や指導法の研究を進めていった。前期は、幼児・児童向け英語活動を“Let's Enjoy English - 親子で英語を楽しもう”と称し、教員 (小玉容子・狩野キャロライン) が担当し、学生がアシスタントとして参加する計 9 回の公開講座として実施した。この年は、第 5 回講座にオーストラリアからの幼児英語教育経験者が、第 6 回講座には、夏期集中講義のために来学中であった CWU の先生方が参加してくださり、子ども達にとっては願ってもない新たな異文化体験の機会となった。後期は前期の経験を踏まえて、学生達が実践実習を行った。この年も 2002 年度と同様に学園祭で“Kids' English”を企画し、40 名近くの子どもの参加があった。

そして三年目の 2004 年は 2003 年と同様、公開講座 (全 7 回) を前期に開催した。この年も第 5 回講座では本学訪問中の元 CWU 交換教授の、第 6 回講座では夏期集中講義を担当して頂いていたアメリカ人講師 2 名の参加を得て、子ども達の異文化体験の機会を増やすことができた。学園祭企画に関しては、子ども 50 名を超える参加者が、親子で歌やゲームなどを楽しんだ。

次に、まず、児童英語教育活動を行うにあたって理解し、考慮すべき基本的、原則的な流れや議論を整理し、その後、各年度の教材研究と実践のまとめおよび改良点や問題点などを明らかにしていく。

英語活動の趣旨と早期英語教育に関する理論

1998 年 (平成 10 年) 12 月、新しい学習指導要領が告示され (平成 15 年 12 月一部改正)、2002 年度 (平成 14 年度) から順次実施されている。その中で、小学校での総合的な学習の時間の取り扱いについて次のように説明されている。

総則 第 3 総合的な学習の時間の取り扱い

1 総合的な学習の時間においては、各学校は、地域や学校、児童の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うものとする。

2 省略

3 各学校においては、1 及び 2 に示す趣旨及びねらいを踏まえ、総合的な学習の時間の目標及び内容を定め、例えば国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、児童の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題などについて、学校の実態に応じた学習活動を行うものとする。

4～5 省略

6 総合的な学習の時間の学習活動を行うに当たっては、次の事項に配慮するものとする。

(1) (2) (3) (4) 省略

(5) 国際理解に関する学習の一環としての外国語会話などを行うときは、学校の実態等に応じ、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化に慣れ親しんだりする等小学校段階にふさわしい体験的な学習が行われるようにすること¹⁾。

以上のように、小学校での英語活動は、“地域や学校、児童の実態等に応じて”“国際理解に関する学習の一環”として、“外国語に触れたり、外国の生活や文化に慣れ親しんだりする”など“小学校段階にふさわしい体験的な学習”が行われるように配慮することとされている。就学前児の場合もこの配慮事項は有効であると考えられる。私たちの活動も、英語を学ばせることより、外国語や外国の文化を受け入れる寛容で開かれた心が育つ素地を育成する一助となればと考えている。

児童英語教育ないしは早期英語教育に関する文献によると、その是非は児童心理学、認知言語心理学、大脳生理学、神経生物学などの理論を用いて議論されてきている。戦後特にその議論が活発になり、脳生理学者のペンフィールド (Penfield) や生物言語学

者レネバーグ (Lenneberg) らの理論が様々な著書や論文、研究ノートなどで引用されている²⁾。ペンフィールドは自然な言語習得が最も旺盛な4歳から8歳頃までが外国語を習得し始める最適期であるとしている(中山編：pp.11-12, 五島：p.17)。レネバーグは人間が言語を習得する際の臨界期 (critical period) を指摘している。2歳頃から思春期までの臨界期においてのみ言語の自然習得が可能であり、思春期以降は脳の柔軟性が低下してしまうと言っている(五島：pp.18-19)。

母国語以外に外国語を学習することは子どもの脳の発達に余計な負担をかけ、知能の発達を阻害する可能性があるという反論も出ている(五島：pp.26-27)。又、外国語学習が母語である日本語の習得に悪影響を及ぼすのではないかと危惧を抱く人もいる(中山編：p.14)。しかし一方で、多言語使用者の方が抽象的概念思考力に優れているという調査研究報告もあり、現在では単に言語の習得だけではなく問題解決能力や創造的思考力が身に付くという長所が評価される傾向にある(五島：p.27)。早期英語教育を受けた者 (Ex) と中学校入学後初めて英語の学習をする者 (Non-Ex) との比較研究の一つでは、Ex が Non-Ex よりも間違いを恐れず、積極的に英語を話そうとする態度が顕著で、中学初学年から高学年でやや差が縮まるものの、高校に入ってからかなり顕著な差が出てくることが明らかにされてもいる。(中山編：p.14, pp.21-23)

海外でも早期外国語教育は積極的に取り入れられる傾向にあり、日本でも80年代から徐々に公立小学校での英語教育の動きが活発化し、90年代には本格化してきた。そして先の指導要領の改訂へと進んできたのである。日本での最近の動きは、これまでの学校英語教育に対する反省が基にあるとはいえ、世界(経済)のグローバル化が背景にあることは確かである。そして、指導要領改訂に続き、平成14年7月には、『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想』を、平成15年3月には『英語が使える日本人』の育成のための行動計画の策定について』を文部科学省が発表するに至っている³⁾。行動計画の策定の中で、「5. 小学校の英会話活動の支援」として、

目標を「総合的な学習の時間などにおいて英会話活動を行っている小学校について、その実施回数の3分の1程度は、外国人教員、英語に堪能な者又は中学校などの英語教員による指導を行う」としている。また英語力との関連で、国語力については次のような位置づけがされている。「6. 国語力の向上【目標】
○英語によるコミュニケーション能力の育成のため、全ての知的活動の基盤となる国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成する。」

日本における早期外国語教育は以上のような研究の歴史や経緯を持ち、現在に至っているのである。

日本で2001年秋に小学校1年生に英語を教えた米国人教師の記録⁴⁾によると、彼はアメリカの大学で言語学の博士号を取得しているが、大学ではESL/EFLのコースを履修したことは無く、“I primarily learned to teach by teaching and by being a language learner.”と述べている。幼い子供(の場合だけではなく、実際は全ての年齢層に言えることなのだが)を教えることは理論だけでなく、経験から学ぶことが多い。小学生は体験的に英語を学ぶことが望ましいとされているが、教師の側も体験的に教授法を組み立てていく部分が大きいのである。幼児・児童英語教育とは、周到な準備をし、それを実践し、改善し、又実践するという過程でもある。また、英語活動を実施できるような関係を、子ども達との間にうち立てることも非常に大切となる。次に各年度の具体的な活動内容をまとめていく。

〈2002年度(平成14年)〉

2001年度の前期は理論、教材研究および教材作成を行い、10月から11月にかけて4回(リハーサルと称した特別版と学園祭企画を含め6回)の“Kids' English”を学生が担当して実施した。

まず児童英語教育体験を記した論文⁴⁾を読み、注意点をまとめ、それらを参考にしつつアクティビティの内容決定と教材準備を行った。以下注意点をまとめると；

- ①「繰り返し練習や復習は大切であるが子供たちにとって苦痛でもある。」—一つのアクティビティを、一回または二回程度で切り上げる。決

して飽きるまではしない。

- ②「教師の仕事は子供たちに身の回りで起こっていることに興味を持たせ、注意を払わせることである。」—子供たちが興味・関心を持てることを探す。
- ③「ユーモアを取り入れる。話し言葉一つ一つも強調して大げさに言うことで子供たちは興味を持つ。」
- ④「スピードを失わない。」—①との関連で、一つ一つのアクティビティのスピードだけではなく、一つのアクティビティから次のアクティビティに移る時のスピードにも気をつける。
- ⑤「TRP (Total Physical Response) practice を多く取り入れる。」—言葉と体を使う活動を中心に取り入れる。

また、小学校英語活動の日本人講師の話の中の具体的な指導上の留意点など簡単にまとめると、

- [1]「覚えて」は子ども達の負担になるので言わない。
- [2] 子ども達に達成感をもってもらうため、言えたら褒める、できたら褒める。
- [3] 日本語を補助的に使う。“Let’s sing a song together.”「一緒に歌おうね。」等。
- [4] 教師も子どもと一緒に英語を楽しむことが大切である。

準備したアクティビティを次に挙げ、それぞれどの段階でどのような目的を持ってクラスに取り入れたかを、学生の準備段階での活動、クラスでの対応等を挟みながら、反省や修正点等と共にまとめていく。

アクティビティ

- (1) Greetings with a song: *Hello, How Are You?* : 典型的な挨拶。身振りを挨拶の言葉に合わせて付け、歌いながら体を動かす。
- (2) “What’s your name?” “My name is ---.” “Nice to meet you.” : 子供たちが最初に出会うであろう質問であり、挨拶である。
- (3) Song: *Head, Shoulders, Knees and Toes* : 英語のリズムに慣れるためのアクティビティ。学

生が 1～2 人を担当して、先ず体の部位 (題名の部位の他, eyes, ears, mouth, nose, tummy, back, cheeks, neck, chin) とその名称を子ども達と確認、発音をする。その後メロディに合わせて、ジェスチャアを入れ、歌う。



- (4) Song: *Hokey Pokey* : (3) と同様に、英語のリズムに慣れるためのアクティビティ。ユーモアのある動きを伴う歌で、子ども達の興味を離さない。“right hand, left hand, right foot, left foot, in, out, tummy, bottom, shake (it all) about” 等を示し、子ども達も言葉とそれらに対応する部位や動き等を確認しながら発音し、その後ジェスチャアを入れ、歌う。
- (5) Physical Exercise : TPR practice の一環として取り入れた。“jump, jog, run, walk, swim, hop” “Next?” “Stop.” これらの言葉を動作と共に発音する。
- (6) Card Game : 身近なものの英単語に親しむ。15 枚程のカードを使用。“bed, bike, cow, rain, box, tree, fish, ball, book, car, moon, star, sun, bus, cake, cat, dog” “This is ~.” “What’s this?” 等の語や表現を用いた。



(7) Bingo Game : 身の回りの「色」「数」に注意を向ける。“red, green, blue, black, yellow, orange” “numbers :1 to 10” 以上を 16 枚で一セットの小さなカードにし、裏に両面テープを張り、4マス×4マスのボードに、コールされたものから思い思いのマスに貼っていく。二度目のコールに従い、鉛筆で丸をつけていき、ビンゴになったら“Bingo”と大きな声で言う。最終回は、カードゲームで使ったカードを小さく作り直し、ビンゴゲームに使用した。



(8) Dinner Game : 生活の中で食事シーンに的を絞り単語を選んだ。“chicken, salad, eggs, bread, apple, ice cream, cookies, cup, plate, spoon, fork, knife” 以上の 12 語を用い、それぞれの絵で呼び名を確認し、その後“Please bring me ~, (name).”の指示に従い、テーブルの上に並べてある食べ物や食器を持ってくるゲーム。チームを作り行う。渡す時には、“Here you are.” “Thank you.” “You’re welcome.” の表現を用いる。



10月5日のリハーサルは、教える側の学生が子どもとの接触機会をこれまで持ったことが無かったため、子どもとの接し方を学ぶためのクラスでもあった。参加者は、顔見知りの子供を含む9名(4, 5, 6歳児, ネイティブスピーカー3名を含む)。6名の学生が受け持った。学生の反省としては、教材のみでなく、どのような場面で、誰が、何を子ども達に伝えるかの準備不足を挙げている。学生には、常に「クラスのシナリオを作ること」と指示してきた。学生は教案(進行表)を作っていたが、どのような声かけをしながら教案の内容を進行していくかに戸惑ってしまった。教える中身と同時に子ども達にどのような声かけをしていくかも活動の中身の大切な一部である。

以下の引用は学生たちの反省・感想を含む実施記録からである：「始める前までに時間がかかってしまった。英語を教えること以前に、子供たちとの接し方を知らなかったの、目の前にいる子供たちに動揺してしまい、タジタジしてしまった。私たち一人一人が、いわゆる“教師”としての自覚が無かったからだと思う…動揺してしまい、最初の一言が言えず…その場で相談していたところは反省すべき点の一つであった。」子供たちは数名ずつ教室に入ってくる。個々に対応をし始めるが、どこでどのようにスタートさせるか、そのタイミングをつかめなかった。このリハーサルで学生が学んだ一番大切なことは、学生が持つべき「教師の自覚」という点であろう。子供を前にし、何かを覚えさせるというより一緒に遊びを通して英語に触れるという姿勢は持ち続けるべきだが、学生は教師の側に自分たちは立っているということをしっかり認識し、教師として何を習得しているべきかをはっきりと意識することが大切である。

このリハーサルでは、まず、導入としての(1)「挨拶の歌」*Hello, How Are You?*から始めた。体を使って歌えるように、言葉に合わせて振り付けを考えた。次の(3) *Head, Shoulders, Knees and Toes* は、(4) *Hokey, Pokey* を含め、子供達の気持ちと体をリラックスさせるためでもあった。子供たちは振り付けや動作を覚えようと必死になり、言葉に注意を向

ける余裕があまり無いようだった。しかし、英語の歌を歌いながら、又は聴きながらリズムに乗り体を動かすことは、子供たちにとっても学生たちにとっても、ウォーミングアップとして適切であった。(8) Dinner Game では、“Please bring me ~.” とだけ言っていたが、呼びかけの名前を入れるべきであった。

実践第二回目は、シリーズで活動を行う第一回目であった。初めて会う子供たちで、今回もまた勝手が違った。参加者 10～13 名 (小学校 3 年生から 3 歳児までで、ネイティブスピーカー 3 名を含む)。学生が 4～6 名で担当した 4 回シリーズの活動で、工夫して上手く進められた点、反省点、修正点などを次に挙げていく。

アクティビティは、

一回目 (1) (2) Greetings (3) Song (5) Exercise

二回目 (1) Greetings (3) Song (6) Card Game
(7) Bingo Game

三回目 (1) Greetings (5) Exercise (3) Song
(6) Card Game (8) Dinner Game (4) Song

四回目 (1) Greetings (3) Song (8) Dinner Game
(6) Card Game (7) Bingo Game (4) Song

というように、できる限り繰り返し、積み重ねに基づいた活動ができるように組み立てた。一回目は年齢差を考慮せず、一つのグループで一度に同じ活動をさせる計画を立てていたため、大きな子の遊び行動を小さな子が真似、それが悪い方向へ向かってしまったため、二回目以降は小さなグループに分けることにした。子供たちも、自分に話しかけられていることがはっきりしたほうが、聞く耳をしっかりとってくれる。また歌のアクティビティでは、保護者が入って一緒に歌ったり踊ったりすると、子供達の喜びもひとしおのようであった。この経験をもとに、今後はできる限り親子で一緒に英語活動に参加できるような企画に変えていくこととした。

一回目では (1) と (3) のように歌を続けたため、目的や用いる語彙は違っても、同じことの繰り返しと受け止められ、「また歌なの」という声が聞こえてきた。子ども達は次々と新しい何かを求めている。それに応えることが興味・関心を持続させるコツであり、先の注意点①を再確認した：類似したアクティ

ビティを続けて使わないこと。(5) Exercise はチームを作り、英語で指示された動作をしながら一定の距離を行き来するリレーとした。動きながらその動作に対応する英語を繰り返す予定だったが、競争の方に気持ちが行き、英語はおろそかになった。少ない回数の中で、英語を発することを強いることはしないように注意した。子ども達の反応は大変良かった。

二回目は (6) Card Game (7) Bingo Game, 共に初めてのアクティビティだったが、子ども達の反応は大変良かった。使用したカードの種類は先に示したが、身近なものを選択した。子ども達は、“What’s this?” という質問に競って答えようとしていた。日本語で答えた場合も正しいことを伝え、英語の単語を繰り返し発音する、という方法をとった。カードの選択の際、場面を特に設定しなかったため、今後単語を示す時はできる限り「場面」と共に用いるように注意が必要である。できれば絵ではなく実物が集められれば子供たちにとって本当に生きた教材となるので、そのような方向で準備する必要もある。ビンゴゲームの時はカードを用い、色と数字に慣れ親しむことを目標にした。このように、できる限り多くの英単語に親しむことは、日常カタカナ英語を使う機会が多いので、それらが英語だということだけでなく、それらの発音の違い等を知らせるためにも大切なことである。子ども達のキャパシティの大きさには驚かされる。時間との関係はあるが、今後は単語数を最大限増やすべきだろう。

三回目。(5) Exercise は 2 回目のアクティビティだったのでスピードを上げて指示を出した。子ども達は速いテンポの動きが大変好きである。“jump, jump, jump” 等と英語を繰り返しながらの行動もできた。子供たちは何をすることが分ることで、少しずつ学ぶ姿勢が身につけてきたことに学生も気付いた。

四回目 (最終回) は子ども達も学生教師もお互いに慣れてきて、良い関係を築きつつあるように感じた。アクティビティも子ども達は何をすべきか一回目で理解しているので、二回目は繰り返しの中にも何か新しいものを加える必要があった。カードゲームでは、カードを探しに行く途中に学生が立ち、何

のカードを探すかを伝えてから先へ進むことにした。子ども達も先へ進むために一生懸命英単語を伝えていた。一つのアクティビティから他のアクティビティへの移行も流れが良くなった。

ビンゴゲームでは、ネイティブの子供たちにカードの単語を読んでもらい、他の子ども達がその後について発音したりもした。「…Chris や Cammila にカードを読んで発音してもらい、それをまねして発音するようにした。日常生活においてこのような機会はなかなか無いので、子ども達も私達も良い経験ができたと思う。全体を通して言えることは、私達の英語の発音が完璧ではなかった点が一番の問題だったと思う。子ども達に教える側としてもっと勉強しておく必要があった」(学生の記録より)。学生は計6回の活動を通して、いろいろなことを学んだ。英語活動で幼児・児童が対象の時(特に少ない回数で少しでも英語に触れてほしい時は)、文字を使うことはあまり無い。子どもにはアルファベットではなく、フォニックスから始めさせる方法もあるように、「音」は大切である。学生達も気付いたように、教える側が、決してネイティブのような発音とは言わないが、音を大切に作る姿勢を持つことは重要である。学生たちに注意を促した発音は;日本語的に例えば「ヘッド」とならないようにすること、特にカタカナ英語が多いので気をつけること;複数形(shoulders等)はしっかり最後の音まで発音すること;l, r, f, v, th等の音に注意をすること等である。教師としての自覚については先に触れたとおりである。

〈2003年度(平成15年)〉

2003年度は、1年目の試みを土台としている。学生の教材研究では、ESLの教師向けアクティビティ集を読み⁵⁾、教材の効果的指導法や進め方に関して理解を深めていった。このアクティビティ集はアメリカに住んでいるNon-Native Childrenのための英語教育用ではあるが、日本で学ぶ人たちのためにも応用できる指導法などを以下にまとめる。

- ①(赤ちゃんが母国語を学ぶ時のように)できるだけゆっくり、はっきり発音する。
- ②何度も繰り返す。疑問や命令の形で話しかける。

- ③努力した時の賞賛・承認等を通して、自尊心を育て、失敗した時の不安を少しでも小さいものにする。
- ④日常生活の中にある行為(料理, 掃除, 歌, 食事等を含め)を体を使って学ぶ。
- ⑤短い文をゆっくりと。絵ではなく実物の小道具を用いる。Shoe Boxに活用できる小物を集める。アルファベット順, または頭文字で分けする。
- ⑥Yes-No Questions を活用する。リスニング力や語彙力を伸ばすためである。
- ⑦Total Physical Response Activities は、幼稚園児から大人までの初心者を対象とする活動であり、リスニング力, 語彙力を伸ばすために活用する。

合計9回の公開講座は、「Let's Enjoy English - 親子で英語を楽しもう」と銘打って、本学の教員狩野と小玉が担当し、小玉が学生6名を指導し、教材研究および教材作成を行った。前年度と時間帯を変更したため、新しく参加者を募ったところ、2歳から7歳までの子ども達11人と保護者7名の参加を得た。2003年度は以下のようなアクティビティを行った。

- (1) Greetings: "What's your name?" "Hello, how are you?" - "I'm fine, thank you."
- (2) Let's Count: "Ten Little Indians"の歌を使って1~10までを数える練習。その後, "How old are you?"の質問。
- (3) Songs: *Head, Shoulders, Knees and Toes, Hokey Pokey, Mulberry Bush, Old MacDonald Had a Farm*等の歌を身振り付きで歌う。
- (4) Cards: 乗り物, 動物, 野菜, 果物などの手作り絵カードを用い, "What's this?"の質問に答えてもらう。単数形を基本とした。複数の場合でも特にその点は伝えなかった。第二段階では, "Yes-no questions"として, "Do you like ~?"と各カードに関して尋ね, "Yes"又は"No"で答えてもらう。
- (5) T P R: "Stand up." "Sit down." "Let's shake hands." "Raise your right (left) hand." "Touch your nose." "Turn yourself around."等。

(6) Let's have Dinner: 前年度の "Dinner Game"

の改訂版。家庭での親子間の会話を想定したシチュエーションで、親が依頼を、それに子どもが応える、という形で行う。

(7) Bingo Game

この年に用いた教案のひとつと新しいメニューを一つ紹介する。

LET'S ENJOY ENGLISH #1 (5/23/2003)

教室に入ってきた子供たちに "Greetings" の後、

1. 子供達と教員および学生で、体の部位の確認。

3:00 - 3:15

- "What is this?" (nose, mouth, eyes, ears, shoulders, knees, toes, chin, cheeks, neck, hands or hand, foot, tummy, bottom, 等)
- "Where is your nose?" (mouth, eyes, ears, shoulders, knees, toes, chin, cheeks, neck, hands or hand, foot, tummy, bottom, 等)
- "Touch your nose." (mouth, eyes, ears, shoulders, knees, toes, chin, cheeks, neck, hands or hand, foot, tummy, bottom, 等)
- "Put your hand(s) up." "Put your hand(s) down."
- Right and left. "Put your right hand up (down) ." "Put your left hand up (down) ." "Put your left foot (hand) in." "Put your left foot (hand) out."

2. Hokey Pokey 3:15 - 3:30

各自、小グループで歌って踊る。そして全体で。
3:30 - 3:40

3. Let's have dinner. 3:40 -

二つのグループに分かれて、食べ物の名前を確認 (3:40 - 55)。ゲームの説明 (3:55 - 4:00)。ゲーム (4:00 - 4:15)。用いる表現は：

"We are hungry. Let's have dinner."

"Prepare the table for dinner."

"Please (give) (bring) me _____." "This is for you, Mammy."

4. 最後にもう一度、Hokey Pokey で、終了。又は "Dr. Seuss's Story Telling" ⁶⁾ (1 回読む)

90 分の予定を立てて組み立てたが、子ども達には長すぎたので、各パート 5 分程度短縮で実施する。全体の開始から終了まで最長 1 時間が限度であろう。

LET'S ENJOY ENGLISH #4 (7/4/2003)

この回の一部を紹介する。

5. *This is the Way* (a song and gestures)

This is the way we wash our face, wash our face, wash our face/This is the way we wash our face./ So early in the morning.

"brush our teeth", "eat breakfast", "eat lunch", "drink some milk", "put on our clothes", "comb our hair" などの表現を置き換えながら練習。

繰り返すと、疑問や命令形、日常のシチュエーション、このような点に特に注意をして、内容を組み立てていった。学生は後期に自分たちで参加者を募り、4 回の "Kids' English" を開催した。教材は参加者の要望に答えてアルファベット用のカードを作ったり、動物の鳴き声 (*Old MacDonald Had a Farm*) を取り入れたり等の新しい試みをしていった。この時も、学生には発音に注意をするように指導した。アルファベットの一文字一文字にも注意し発音をするために、学生は『アメリカ口語教本・入門用』⁷⁾ の音声教材を利用して、単調だが大切な「単語の繰り返しの練習」も行った。彼女たちの教材作りの熱心さと器用さにはいつものことながら感心する。彼女たちが如何に子供たちに対して自信を持って実践活動を行うかは大切な要素であり、その自信はやはり日々の英語の勉強に基づくものなのだが、教員側も「細部まで、時間をかけて、繰り返し」をモットーに準備段階での指導していくことが大切である。

〈2004 年度 (平成 16 年)〉

2004 年度も 2003 年度と同様に、公開講座として実施した。参加者は子ども 9 名、保護者 4 名、学生は 2 ~ 3 名で対応し、教材作成には 7 ~ 8 名が参加してくれた。新たに取り入れたアクティビティの

主なものを次に挙げる：

- (1) Song: *If You're Happy*
- (2) Story: "Mari's First Shopping Trip" (An Original Story with pictures)⁸⁾
- (3) Dice Game: すごろくゲーム⁹⁾
- (4) Let's Go Shopping

(1) の歌をうたう時、子ども達は先生の口を見て、歌を歌っていた。このように英語を発する人の顔(口)を見ながら真似るので、教師も子ども達の顔をしっかりと見て、活動を行うように注意をしなければいけない。よく知っているメロディで、子ども達は元気よく歌い、歌に合わせて身振りをすることができた。参加者は昨年から引き続き参加してくれた家族が中心だったので、英語活動の雰囲気は既に出来上がっていた。

(2) は、Story Telling のオリジナル版である。2003 年度も Dr. Seuss のストーリーを取り入れたが、本選びの難しさをこの時実感した。2004 年度は、オリジナルのストーリーを紙芝居にして子ども達に絵を見せながら聞かせ、質問を挟みつつ進めた。次にストーリーを紹介する(絵は資料1を参照)。

Story: #1 "Mari's First Shopping Trip." (絵を指し示しながら) : This is Mari. She is 6 years old.

#2 This is Mari's Mommy. Mari's Mommy is sick. Mari's Mommy is sick in bed. Mari is very sad.

Mari: "Poor mommy."

#3 Mari's Mommy went to see a doctor.

Mari: "I have a good idea. I will make a salad for Mommy."

#4, 5 This is Mari's first shopping trip. (お使いの途中で Mari が見る様々な物や人を指し)

"What is this?" (It's a patrol car, a fire engine, a car, a post office, a police box, school, a swing(s), a slide)

"What is he (she) ?" (He is a police man, a post man, a fireman or a fire fighter, a teacher, a doctor)

#6, 7 "Here is a supermarket. Here comes Mari. What does Mari need to make a salad? Does she

need ___?" (potatos, tomatos, carrots, onions, eggplants, green peppers, cucumbers, lettuce, eggs, milk, bread, chicken, ice cream)

#8 Mari is making a salad. This is Mari's salad. Mommy: "Thank you, Mari. It's delicious."

Mari: "You are welcome, Mommy." Mommy is fine now. Mommy is happy. Mari is happy, too. Are you happy, too? (Yes!)

(3) すごろくゲームをするために、大きな手製のすごろくを作成し、出た目の数を数えたり、進路上に指示を与えたりして、単にすごろくを振って進むだけのゲームにならないように工夫した。しかし、4~5人が順番にすごろくを振り、駒を進めていくと時間がかかり、待っている子ども達は飽きてしまった。結局工夫して2回目も実施したが、上手に運ぶことはなかなか難しかった。子ども達はチームに分かれてのリレーのような競争では、自分の順番を待てるが、個人個人がプレーする時は自分の順番が待てなくなってしまう傾向がある。

(4) は(2)のストーリーをもとにしたショッピングで、子ども達は大変喜び積極的だった。母親が店員になり、子どもが店で買い物をする、学生が子ども達の買い物について行き、補助的な役割を果たした。店は4店で、それぞれカードゲームで使用する vegetables, fruits, cooked food, dairy products, そしてプレゼント用の鉛筆などを並べた。

Clerk: May I help you? / Child: Yes, please. I'd like ... / Clerk: Sure. Here you are. / Child: How much is it? / Clerk: A (two) dollar(s). / Child: Here you are. Thank you. / Clerk: Thank you. Please come again. / Both: Bye. Good-bye. See you.

おもちゃのドル札を持って、子ども達はそのお金を使い切るまで、品定めをしながら次々と、台詞を言いながら買い物をしていた。アメリカからのゲストも加わり、大成功の教材であった。

まとめ

私達が提供した教材を使って英語活動をする中で、参加してくれた子ども達はそれぞれ経験の上積

みをし、この経験が彼らの今後の成長の過程で小さくても何らかの役割を果たしてくれるものと期待したい。

児童英語教育では、対象年齢が低ければ低いほど教える内容は限られてくるが、教える側の備えるべき知識や資質は限られるものではなく、かえって広がっていると言える。子ども達に教えることで短大生は英語のリズムや音声面でこれまで比較的不足していた基本パターンの繰り返し（声を出しての）や、基本的な発音における注意など、読んだり聞いたりする英語の内容が複雑になればなるほど触れることが少なくなってくる英語学習の基本に立ち戻る必要があることを理解できたようである。実際、学生達は、簡単な会話や一つ一つの発音（歌や単語）に注意をし、しっかり自分のものにして、子ども達をサポートしていた。当然のこととはいえ、学生は教える内容レベルのこのみを知っていれば良いのではない。扱う表現や単語数の少なさに対して安心するのではなく、日常生活の様々な要素、衣食住レベルの語彙を広い範囲で知っていなければならないことを再確認しなければならない。

3年にわたり開催した学園祭での“Kids' English”の企画も大盛況であった。保護者の関心の高さをあらためて実感した次第である。今後、幼児・児童英語教育に関心を持つ学生の要望に応えていくために、英語の基礎的四技能の習得に力を入れている本専攻の姿勢を維持していくと共に、学生の可能性を引き出すことができる幼児・児童英語の教材研究や実践になるように計画していきたい。

注

*過去3年間の「幼児・児童英語教育の研究と実践」において、実践に関しては学生が作成した教材に拠るところが大きい。学生は平成14年度「English for Kids」(岩成尚子・植田しおり・黒光妙子・小谷陽子・島田法子・三嶋朋子)、平成15年度「幼児・児童英語教育の研究と実践」(大平愛・影山奈々美・金子茉莉・藤井清美・村上詩織・山口真衣子)と題する卒業

研究レポートをまとめていることも併せてここに報告する。平成16年度参加学生名は大田静香・三原史・三谷麻衣他。その他多くの学生が教材作成に加わってくれた。参加して頂いたゲスト講師やご家族そして2003年度と2004年度の公開講座の担当に加わってくださった狩野キャロライン先生にも感謝の意を表したい。

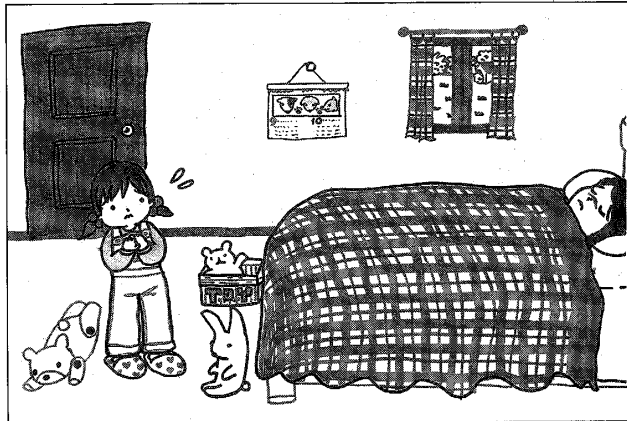
- 1) 「学習指導要領」1998年(平成10年)12月告示、平成15年12月一部改正。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301/03122601/001.htm
- 2) 中山兼芳編『児童英語教育を学ぶ人のために』世界思想社、2001。
五島忠久『子どもが英語と出会うとき：児童英語教育の進め方』杏文堂、1983。
- 3) 『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画の策定について』(平成16年10月6日)
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/03/030318a.htm web資料 p.8
- 4) J.R.Ossorio, “Some Notes on Teaching English to Young Children: Looking Back on my First Year”, 『聖和大学論集』第29号, 2001, pp.21-33.
- 5) Elizabeth Claire, *ESL Teacher's Activities Kit*, Paramus: Prentice Hall, 1998, pp. 1-98.
- 6) Dr. Seuss, *One fish two fish red fish blue fish*; New York: Beginner Books, 1960, pp.1-5.
- 7) W.L. クラーク, 『アメリカ口語教本・入門用』, 研究社, 1959年初版, 1997年18刷。
- 8) ストーリーの原案は小玉が作成し、英語表現については狩野キャロライン助教授に相談した。紙芝居の絵は文学科英文専攻2年 三原史が担当した。三原は他にも多くの教材の絵を描いてくれている。ここに謝意を表したい。
- 9) 増尾美恵子『子どもを夢中にさせる英語のレッスンプラン』ピアソン・エデュケーション, 2001, pp.178-179.

(平成16年10月29日受理)

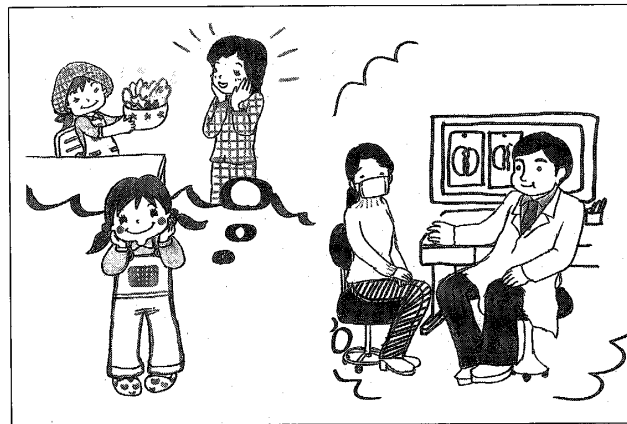
資料1 #1



#2



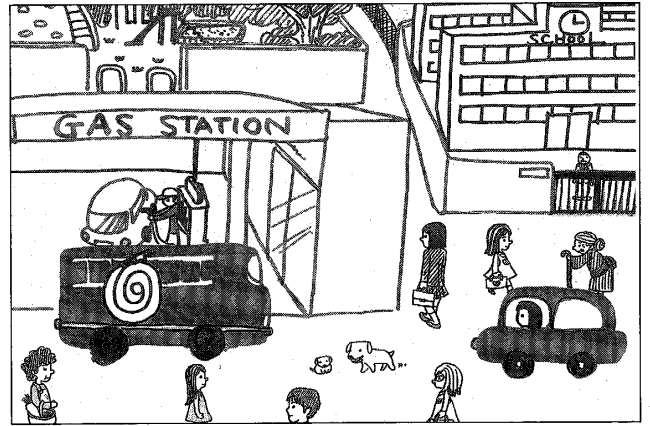
#3



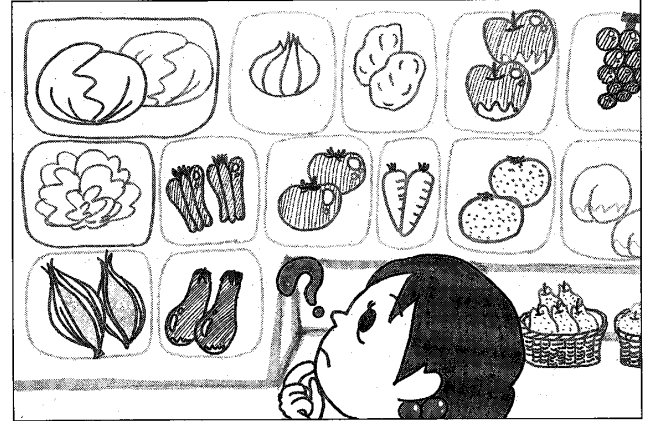
#4



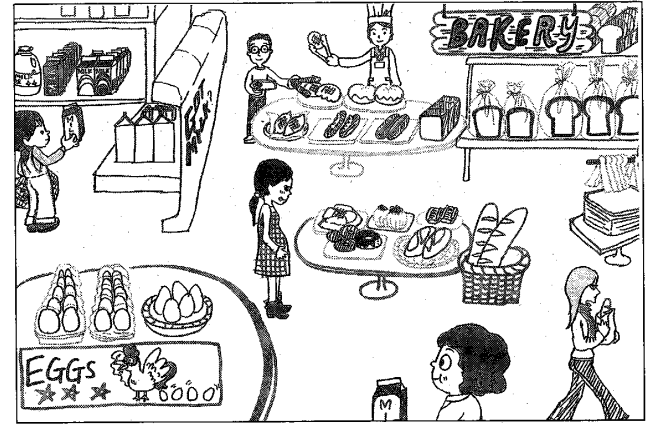
#5



#6



#7



#8

